

田中さんの思い出

田畑, 義之

九州大学情報基盤研究開発センター外国語情報メディア研究部門 : 教授 : 外国語教育学、eラーニング

<https://doi.org/10.15017/13985>

出版情報 : 言語文化論究. 24, pp.157-158, 2009-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン :
権利関係 :

田中さんの思い出

田 畑 義 之

10月1日の朝、庶務係から研究室にかかってきた電話で田中俊明さんの訃報を聞きました。とても信じられませんでした。鈴木さんのお葬式から帰って来たのがついこの間のこのような気がするのに、今度は田中さんが突然逝ってしまわれるなんて…。

田中さんにこれまでどれだけ支えられてきたか、今になって思い知らされます。45分ペアクラス、インテンシブコース、外国語コミュニケーションコース、夏休みの集中講義、これらはみな田中さんのバックアップとご協力があってこそ実現したものです。また、科研費の研究分担者として共同研究もさせていただき、その成果を九大出版会から共著で出版することもできました。こんなにお世話になった田中さんの追悼文ですから、書きたいことは沢山あるのですが、いざ書こうとすると全然まとまらず、思い出ばかりが断片のように次々と浮かんでいきます。

田中さんは元々ドイツ語音声学を研究されていましたが、「何の教育方法論もなく、見よう見まねの自己流でドイツ語を教えることに疑問を抱くようになり（ホームページの記述より）」、外国語教育の理論面からの研究に取り組みられるようになったそうです。私もミュンヘンのGIでドイツ語教授法の研修を受けてから外国語教育を研究テーマにしていたので、自然と親しくしていただき、各地で開かれる学会やシンポジウムによくご一緒させていただきました。84年から96年まで開催されていた豊橋技術科学大学主催の外国語教育シンポジウムもその一つで、90年からほぼ毎年一緒に参加しました。革新的な外国語教育を推進していた慶応湘南藤沢キャンパス（SFC）の教材を初めて見たのもこのシンポジウムでした。そのSFCにも一緒に視察に行き、関口一郎先生の授業も見学させてもらいましたが、それがSFCのインテンシブのサブセットとしての九大のドイツ語インテンシブコースにつながりました。

そのインテンシブコースも今はもうありません。法人化以降、国立大学の研究・教育環境はますます悪化していますが、初修外国語をとりまく環境も例外ではありません。母語以外に2つの外国語の習得を推奨するEUとは対照的に、「英語さえできればよい」、「英語ができれば国際人」という考えが支配的なこの国では、「初修外国語は時間数も少ないし、どうせものにならないんだから単位さえ取ればいいや」という学生が多いのも無理のないことかもしれませんが、そんな中でも田中さんはドイツ語とオランダ語の教育に情熱を傾けてこられました。入試のための受験英語に毒されて、それまでの英語の学習法が唯一のものと思っている学生に対して「何でも独和辞典を引いて日本語で考える暗号解読ではできるようにならない」と説き、常にドイツ語で考える授業を目指していました。

田中さんは最近は少なくなった、学生をきちんと叱れる先生でした。学生に媚びたりしないので、一部の怠惰な学生からは煙たがられることもあったようですが、わかっている学生には正しく評価されていました。ご専門は音声教育学でしたから、ご自身の発音が素晴らしかったのはもちろんのこと、言語の基本は音声だという考えから、音声教育に力を入れておられたので、田中さんに習った学生はみなとてもきれいな発音を身につけていました。箱崎分室の授業で発音の良い学生は、ほ

とんど田中さんの教え子でした。ご存知の方も多いと思いますが、田中研究室の前にはよくたくさんのカセットテープが置かれていました。学生の発音をチェックして指導するため教科書の朗読を吹き込ませて提出させておられたのです。1クラス40名もの学生がいれば授業中に発音を個別に指導することは不可能ですから、きちんと発音指導をしようと思えば課外にやるしかありません。40人のクラスだったら普通は発音指導なんて諦めてしまうところですが、田中さんはそうではありませんでした。カセットですからいちいちカセットレコーダーに入れて、場合によっては巻き戻して聞くことになるので、1本聞くのにもかなり手間と時間がかかったはずですが、また、各課のテーマに合わせてドイツ語での自由作文も提出させ、添削しておられました。私も少人数クラスでは作文を添削して文集を作らせたりもしていましたが、田中さんのように40名分の添削となると、それだけでも大変なご苦労だったことと思います。

田中さんは元々数学を専攻されていましたが、大学で第2外国語としてドイツ語を学んでから外国語に興味を持ち、方向転換されたそうです。このようなご自身の経験から、第2外国語としての限られた時間数であっても、学生に興味を持たせることはできるし、興味を持たせることができれば、その言語が使えるようになるまで持って行くことも可能であると信じて、熱心に授業に取り組まれていたのだと思います。

田中さんは旅人でもあり、毎年海外に出かけておられました。ホームページには何年にどこに行かれたかというリストがあって、それによるとヨーロッパ、アジア、アフリカ、北アメリカ、オセアニア（南米と南極以外の全大陸制覇！）の全部で60ヶ国に行かれたそうです。ホームページのデータは残念ながら2001年の4月時点のもので、最終的に何ヶ国を訪問されたのかはわかりませんが、70ヶ国を超えていたかもしれません。アイスランドやサハラ砂漠へ行かれた時のお話を聞かせてもらいましたが、未知の世界の話は大変興味深く、もっといろんな旅の話をお聞きしたかったです。他にもスキーや将棋についてもホームページに記載されていますが、それによると81のスキー場で滑降され（そういえば「年末年始はカナダでスキーをしてました」などとさらっと言っておられましたね）、将棋は六段の腕前だったそうです。

ドイツ研修旅行でも第2回から第6回まで、毎回引率されていましたが、第4回のレポート集には、ユースホステルについて次のように書かれています。

また、ユースホステルの設備が悪かったり、十数人室などの「大部屋」に割り当てられて不満をもらした人はおりませんでしたか。私は以前50人室に泊まったことがあります。もちろん良い設備、環境であれば、それに越したことはありませんが、たとえ悪い設備、環境におかれても、不平を言わずにその中で出来るだけより良く過ごそうという努力が必要だと思います。日常生活においても同様のことが言えるでしょう。いくら不平・不満を言ったり、嘆いたりしても、現状は良くなりません。現状を正確に把握し、最善の道を探す努力が必要不可欠であると思います。

田中さんはこのようなお考えで困難な状況の下でも熱心に指導されていたのでしょ

うです。田中さん、私と同じく田中さんもお昼はいつも生協でしたね。今でも生協の食堂へ行くと無意識のうちに田中さんの姿を探してしまいます。もう間もなくその生協食堂も六本松キャンパスもなくなります。キャンパスは変わっても九大のドイツ語教育はこれからも続きます。田中さんが目指しておられたドイツ語が本当にできるようになる授業を実現するにはどうしたらいいのか、まだ答えは見つかりませんが、田中さんの志を引き継ぐためにも4月からは新しいキャンパスで今までの授業とは全く違う試みをするつもりです。どうかこれからも見守っていて下さい。